

◇編輯室より◇

●初夏の新緑が滿都を覆つた、ある人が森の都とさへ叫ばれる丈に場所によつては早や敵軍の總攻撃猛烈である、幸に新會館には一樹も見の代りにこの憂が今分らない、そこで殺生もせず済むと思へば實に嬉しい。

●静かなるべき京洛の天地に、好ましからの物議が醸されつゝある事の原因はいづれにもあらうが、上長の命に服せざるのみならず彌々反抗態度の範を、最高學府から示すに到つては、教育の價值尊嚴もあり得ない、是れこそ學問亡國であるまいか。宗教のない教育は智慧ある惡魔を造るの言、何と嘘でなからう。

●今の時大義明分を明かにする事が極めて必要と思ふ、恰も本誌下山鈔の 恩師御講述をば特に御精讀願ひたい。和賀上人が御不自由のお體であり乍ら、釋尊と日蓮聖人の長篇を御執筆下さつた事は、私共の慚愧措く能はざる所である。開祖什師の謨議章を平易に講明せらるゝ梶木上人の法勞洵に多とするものである。

●數千里の海外にも同志はあつて遙かに 恩師の追憶を寄せられた武田氏、又關西の篤信井上氏の感話と共に私共の臉を熱上せしむる ●貝塚氏の品川問答は、ひれくれた理窟なしに、其輪廓が紙筆に依つてメラ／＼と示されてゐるのはうれしい。

●松尾清明師が涙の出る御不自由サで、御寄稿を戴きつゝ次號に割愛せる事を深く遺憾とするもの、爰に陳謝しておく。

●氣候の換り目に皆様の御自愛を祈り上ります。

目次

聖語	三首御詠義解(上)……………日生上人
世法即佛法……………松尾清明	
花卉藝術と宗教……………松尾清明	
解説	京大法學部の側面觀……………波心庵
記	かくて大事を成す……………波心庵
事	○本團報並に各地教信
	○寄附團費誌料領收

第三十八年七月號

料告廣一統		價定一統	
四分	一分	一冊	一冊
頁	頁	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
金	金	送料共	送料共
五	九	送料共	送料共
圓	圓	事之金前	事之金前
事	之		

昭和八年五月廿四日印刷納本
昭和八年六月一日發行 (第四百五十九號)

東京市小石川區音羽町六丁目一七

不許複製

編輯兼發行人 磯部滿事
印刷所 東京市品川區品川二丁目一八一 都印刷所
電話 葛輪六〇二四番

發行所 東京市小石川區音羽町六丁目一七
財團法人統一團
電話 牛込五三三六番
番替東京九四二〇番

統一

財團法人統一團發行

聖

語

悪の中の大悪は我が身に其苦をうくるのみならず、子と孫と末へ七代までもかかり候けるなり。善の中の大善も又又かくのごとし目連尊者が法華經を信じまいらせし大善は、我身佛になるのみならず父母佛になり給ふ。上七代、下七代、上無量生、下無量生の父母等存外に佛となり給ふ、乃至子息、夫妻、所従、檀那、無量の衆生、三惡道をはなるるのみならず、皆初住妙覺の佛となりぬ故に法華經の第三に云く願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道云云。

— 五關空御書 —

三首御詠義解 (上)

日生上人

日蓮聖人の御歌はいろ／＼あつたでありませうけれども、世に傳はつて居るのは三首の御詠であります。その他にもありますけれどもそれは何れも疑はしいので、先づ日蓮聖人の御詠としては三首といふことになつて居るのであります。この三首の御詠に含まれて居るところの御教訓の意味合を少し深く立入つて研究をしてお話を致して見たいと思ひます。これに就ては地明會の最初の頃に統一閣に於て一度お話を致して、その速記は「日蓮主義初歩」と題する冊子になつて大體閣から出版をして居ります、その際に一通りのお話は申し上げたのでありますが、今日は少し深く立入つてこの三首の御詠に含まれて居るところの御趣意を御紹介して見たいと思ひます。

三首の御詠といふのは

自から横しまに降る雨はあらし

風こそ夜の窓をうつらめ

葦の葉の形は舟に似たれども

浪華の人を得こそわたさね

立渡る身の浮雲も晴れぬべし

たへの御法の鷺の山風

この三つであります。この第一首は人格の修養に就いてお示しになつて居ると思ふのであります、第二首は教の撰擇に關しての教訓であり、第三首は信仰生活の法悦を謳はれたやうに思ひますが、この三つの御趣意を十分に味はつて見たいと思ふのであります。

宗教の問題に於ては人格の完成、教義の撰擇、法悦の生活といふやうなことは非常に大切な事柄であつて、この三つが完成すればそこに立派な宗教生活が遂げられる次第である。幸に日蓮聖人の御詠が三首あつて、その三つにさういふ重大な意義が示されて居る、それだけでも十分に記憶する價值があると思ふのである。日蓮聖人の御詠と言へば人格修養の事と、教の性質を撰ぶ事と、さうしてその信仰生活に於て法悦を誦ふといふ事である、この三つの事が御詠の御趣意だといふことを整へて併せ考へることにて、既に立派な教訓であると思ふ。大體宗教の信仰は貧弱低級になりたがるのが一種の弊害である、成るべく安愼な安心といふこともそれは大事なことである、多數の人達の爲めには手近かにして簡單な事が大變によいけれども、その簡單な裏には直ぐにそれが貧弱とか低級とか暗愚といふやうなこ

になりたがるものであるから、簡單といふこともよいけれども、その簡單が能く整うて、さうして意義の深い事であればならぬと思ふのである。幸に日蓮聖人の三首の御詠にはさういふ意味が含まれて居るといふことに就いて、これは信者として記憶せられる上には洵に好都合のこと、考へるのであります

最初の

自から横しまに降る雨はあらし

風こそ夜の窓を打つらめ

といふ御歌の御趣意は、表面に現はれて居るところを見れば、天から雨が降つて來るのは決して横しまに降るのではなくして、真直に雨は降つて來るのだけれども、風が吹いて之れを煽るものであるから雨が横倒しになつて、さうして屋根の下にある所の窓の障子にあたるやうなことになるのである。人間の心も生れながらの性に率へば真直な立派なものであるけれども、この人生に於ていろ／＼の誘惑や或は刺戟がある爲めに、拗／＼て人間の心が悪くなつて行くのである。それ故にその本の柔順な性にかへるやうに修養を積んで行かなければならぬといふことを言はれたのである。

それでマア大體分つた譯であるけれども、それだけでは別段私がお話をする程な必要もないのであるが、その意味を段々辿り辿り行くといふと、この人格修養の問題の一番大切な事がある中に含まれて居るのである。その一つは人間性の本質が立派なものであるといふ事、一つは人生にはいろ／＼な誘

惑といふか、外部の縁といふものが恐るべく思むべきものが多いといふ事、この二つの大きな事柄が茲に現はれて居るのである。東洋の文化に於ては、神ながらの教に於ても、聖人の教に於ても、佛の教に於てもこの點は一定して居る、これは西洋の文化と異なる點である。西洋の文化は基督教で言ふても、人間の心が善いか悪いかわからないのである、始めからばんやりして居る、「神様に拵へて貰つたといふならば善人か」といふと「それはちよつと待つて呉れ……」「賢いか」といふと「ちよつと待つて呉れ……」「といふやうな工合である。そこで神が拵へた人間が蛇に騙されるといふ、騙されるといふのは始めから馬鹿に拵へてあることを證明して居る、さうして何をしたかといふと悪い事をしたといふ、悪い事をするといふにはする性質がなければするものではないのである。さうするとどうも西洋の基督教で言つたばかりではない、さういふ思想觀念が西洋人には一般に及んで居るのである。それから宗教以外の觀念でも自然主義など、言つて、人間といふものは餘程悪い方に考へられて居る。西洋の自然主義文學といふものは、人間の自然の儘を見れば醜いものである、穢ないものである、それを蔽ひ隠すのは人爲的であつて、即ち繕い仕事である、偽らざるものは醜いものであるといふやうなことを盛んに書き立て、居るやうに思はれるのであるが、それは確かに西洋思潮である。西洋の基督教なり西洋の文藝は、人間の本質といふものをはつきり見定めて居らない、寧ろ之れを悪いものゝやうに考へて居る。

所が之れが一つ人間そのものゝ本質が悪いと相場が極つてしまふといふと、あとは失望するより外ないのである。例へて見れば茲にいくら磨いても磨けば磨くほど中から詰らんものが出て来る、下らない石みたやうなもので、石の中は土である、その又中は炭團であるといふやうなものであれば、段々磨けば磨くほど下らないものが出て来るから、それは磨かないで成るべくそつとして、そこに銀紙でも張つて置かなければならぬといふことになる。人間がその素質が穢いものだ、悪いものだといふことになる、唯だ上から貼つて誤魔化すやうな方法より外ないことになつて来るから、修養の方法も教化の方法も萬事變つて来るのである。

東洋に於ては最初からその問題が非常に喧しかつた、それが人類の文化を造る原則の上に大關係があるといふことを、東洋の聖賢は同じ様に考へたのである。そこで日本の神ながらの教などでも、早い頃からして、人間が立派なものだと言ふ方が勝つて行くやうにしなかつたならば、世の中は闇だといふことになつて居る。天の磐戸の話もやはりそれである、あれは詰り善い方の考へど悪い方の考への衝突であつて、悪い方が一時勝ちかけた爲めに天照太神が岩戸の中にお隠れになつた。その儘で岩戸を開けてお出ましにならなかつたとすれば、日本は悪い方を表にした文化になるのだけれども、如何に力が強からうとも勢力があらうとも、邪なる者はいかぬといふので、その岩戸の外に居る人達がみなこれに反對をして、どうしてもその正しい天照太神に出て戴かなければならぬといふ勢力が勝つて、さうして岩戸を開くことゝなつた。それは形に現はして居るけれども、人間の心の方にやはりその二つの闘ひが

ある、さうしてその悪い方は之れを斥けてしまはなければならぬ、正しい方を以つて人間の本性とするといふことであつたのである。それ故に最初に出雲の國に始めて日本の神社といふものが出来た、即ち出雲の大社が出来た、これは大國主尊が人間の靈魂をお祀りになつたものである、神様が人間をお祀りになつたのである、人間といふものは非常に尊いものがある、神の性と同じ立派なものがあるのであるから、それを忘れぬやうにせよといふので靈魂といふものを神社に祀られた位のことである。さういふことは西洋人から言ふたならば、人間を祀つたりなんどするのは非常に悪いことだと考へて居る。基督教でもやつて居る人は明治神宮が出来ても顔をお祀りして居る、「どうも日本は天子様を神様にしたりなんかして困つた國だ、野蠻な國だ」といふやうに考へて居る、さういふ工合に彼等は人間といふものを神様など、は非常に違つたものに考へて居る。

神ながらの教に於てはその思想はどこ迄も明かになつて、人間の心を磨けば丁度鏡の光るが如きものであるといふので、天照太神は鏡を以つて日本の一番大事な教にせられた。それは一切を貫いて居るところの根本原則の教である、日本人は皇祖皇宗の遺訓として脊々服膺するに就いて何が一番大事かといつたならば、あとは枝葉である、一番大事なのは神様が鏡をお教へなされた事である。それは日本人の靈魂は鏡の如く磨いて行かなければならぬ、又磨けば光る鏡のやうなものが人間であるといふことを前提としたものである、「自から横しまに降る雨はあらし」といふことが皇祖皇宗の遺訓の根本問題であ

る、之れを今日でも定め得ないが爲めに思想が動搖するのである、破壊主義者や過激思想などは、「モウ人間の靈魂ナンといふものは誤魔化し合ひであるから、浮か／＼して居つたならば逆もいかん、早くやつければいかん」といふやうな風に考へて、モウ人を見たならば不都合な奴だと思つてかゝれといふ風にのみ考へて居るのである。

聖賢の教もその事は非常な問題になつたのであつて、聖賢がその中心の思想として傳へたのは堯舜の教であると言つて居るが、堯は何と言つたかといへば「允に厥の中を執れ」と言つた、この言葉は餘りに簡單にして分らぬといふので、舜がこれに註釋を加へて「厥の中を執れ」といふのは、即ち人間の心は二つに働く、一つは淨い方の「道心」といふものである、道の心は在るけれども、放かして置くといふとそれが非常に微かになつて弱つてしまふ、モウ一つは悪い方の「人心」といふ穢れた心があるが、その方が却つて蔓つて行くものである。さうしてそれを思ふが儘にすれば今の所謂放縱生活といふか自然主義生活といふものになつて、必ずや間違ひが起る、そこで「人心惟危、道心惟微、惟精、惟一、允に厥の中を執れ」(書經)、この靈魂の根本の善い方を力づけるといふことを忘れてはモウ道といふものは無いといふことを舜が言ふたのである。それが即ち聖賢の教の根本生命である、それが「論語」となり「大學」となり「中庸」となつて一切の聖賢の教といふものはそれから花が咲いて居る。それ故に聖人の教は「道心惟微かなり」といふことが、やはり今の日蓮聖人の御歌と同じことで

「自から横しまに降る雨はあらし」といふ意味を舜が傳へたものである。それ故に孔子が先王の教を祖述するに方つても、やはり大事な事はそこだといふので『大學』といふ書物の始めに『大學の道は明德を明かにするにあり』といつて、本當の學問は人間の持つて居るこの明德を明かにするのであるといふことを説いて居る。

この明德鏡の如きものであるといふ思想は、左様にして神ながらの教でも、聖人の教でも同じ事である。佛教はどうかといふと、佛教はその事に於て一番詳しい材料を有つて居る。日本の神様の鏡といふやうなことも、本當に歴史的に調べたならば佛教から出た思想であらうと思ふ、それは本當の學術研究から言ふたならば、みな佛教の影響から出た思想と言ふが本當であらうと思ふけれども、併し日本の歴史の表面から言へば、さういふ事まで今茲で證據立てする必要もないが、私の見た書物の順序から行くと、佛教の古い／＼書物の中に、人の心は鏡の如しといふことが澤山説いてある。それは阿含部の諸經を御覽になれば能く判かる。それであるから佛教は人間の心の問題に就いては先づ一番豊富な教を有つて居るが、併し法式は同じ事である。神ながらの教も、聖賢の教も、佛教も、みな人の心は淨い立派なものぢやといふことを前提として居る、西洋の基督教や西洋の文藝のやうに、人の心を穢ないものだ、暗いものだ、騙されるものだといふやうな方からは見て居らない。これが東西文化の非常な相違點である。

さうして西洋の人間觀といふものは、その出發點が穢れて居るのみならず、落つく所が結局神様に成れないのである、人間はどこ迄も天國に入つても唯だ神の側でお給仕をするだけのもので、天國の庭掃きに成るに過ぎない、神に成ることは許されない、それが所謂一神教といふので、神は一人しか居ないといふ。所が東洋は汎神主義といふて、誰でも神様にも成れるといふことを許して居る、始めが淨いもので、終りが神や佛に成れるといふ。西洋は始めが穢れたもので終ひが頭が支へて向ふへ行けないといふことになつて居る。非常な違ひである。それ一つでも西洋の文化は決して東洋に勝れて居るといふことは言ひ得られないのである。さういふやうな事を考へないで、唯だ西洋の枝葉の學問、枝葉の科學上の知識であるとか、經濟の事とか醫學だとか法律だとかいふことを見ると、向ふの方が細かい事をほぞくつたことは進歩して居るものだから、それで一概に西洋がよいやうに思つただけでも、人間の一番大事な問題はそんな枝葉の學問の問題ではない、精神の根本の問題である。

そこで佛教の方に於てはその事を詳しくお教へになつて、最初阿含の教で言へば『自ら其の意を淨くす、是れ諸佛の教なり』といふことがある、これが佛教を一言で言ひ現はしたと言はれて居る。佛教を簡單に一言にして言へば『自淨其意是諸佛教』といふことになる。『自ら其の意を淨くし』即ち美しい精神を磨いて、淨い精神を起さなければならぬといふことが佛法である。終ひには信心とかいふろの言葉になるけれども、さういふことよりもモツと根本的なものは、佛教は、人間といふものは心を

落つてデツと考へたならば、非常な美しい綺麗な精神を有つて居るのである、その有つて居る光を輝かさなければならぬといふことが佛法であらうと思ふ。

それが爲めに阿含の教からいふと、その淨い精神を維持するにはどうしたら宜しいかといふことで、いろ／＼な教が立つて居る。大體は外から来るもの、爲めに美しい心が穢されるのであるから、そこでそれを「六塵」と名けた。さうして自分の方に「六根」といふものがあつて、その塵を吸ふのである、モヤ／＼と塵が立つて居る、日の當つて居る所で部屋の中で布団を畳んだりするとバツと塵が立つ、人生といふものはア、いふ風なものだといふ、さうして六つの所からその塵を吸ひ込んで来る。六根といふのは「眼、耳、鼻、舌、身、意」と稱して、眼と耳と鼻と舌と身と意とこの六つが、向ふの對手に、「色、聲、香、味、觸、法」といふものがあつて、色を見るにつけて人間の眼が迷ひ、聲を聞くにつけて耳が迷ひ、香を嗅ぐにつけて鼻が迷ひ、味ひに依つて舌が迷ひ、觸覺に依つて身が迷ひ、いろ／＼な理窟や何かの事柄に依つて意が迷ふといふやうな譯で、この六塵に對して六根の心の働きのいふものが極き紊される。それは濁つた空氣の中に居れば氣分が段々悪くなるが如くに、泥水を飲んで居れば氣分が悪くなるが如くに、人生といふものは六塵に依つて人々が心を穢されるやうに出来て居る、そこに非常な警戒を要する。どういふ人でもさういふ關係を有つのである。

その事を阿含に於ては非常に嚴密に合理的に説明をせられた、凡そ人間が人格修養の方法を考へるに就いて、佛教ぐらゐ合理的にさうして豊富な説明を有つて居るものはない、あとは切つばしである、好い加減なものはその間に合せである、佛教は實に本格である。それがわからないで儒者輩が佛教の悪口などを言つたのであるが、實にそれは文化の轉倒といふものである。非常な立派な料理屋の御馳走を、田舎のかみさんがやつて来て、「この大根の煮方が違つて居る」とか何とか言ふのと同じ事で、見たことが無いものであるから吃驚して居るのである、實にその通りである。吾輩は盛んにさういふことを唱へて居るけれども、どうして日本の文化がその間違ひを改めないかと思ふに考へて居る、實際佛法の教といふものはその事を能く説いてある。さうして唯だ合理的説明ばかりでなく、それは種々の因縁譬喩を以つて、如何なる人にもわかるやうに、斯ういふ人がこんな事で迷うた、こんな事でやり損なつた、併し斯ういふ所から改心をして斯う成つたといふ、人間の墮落と修養の關係を詳しくお説きなされたものである。

それが段々進んでいろ／＼の教訓となつて来たが、残つた大事な問題といふものは即ち一つである。それは所謂「佛性」と「煩惱」の問題で、どこまでもそれが關係をして來るのである。煩惱の外に「客塵」といつて吾々を迷はすところの今申したやうないろ／＼の塵がある、その客塵が手傳うて煩惱と合體して、さうしてこの淨い精神を迷はすのである。簡單なことで申して見たならば能く判かる、自分に酒が飲みたいといふ考へがある、さうすると酒は衛生に害ありといふことは知つて居つても、一パイひ

つかければ気分が好いナーといふやうなことを考へて居る。そこに人が酒を持つて来て「サア、君一杯どうだ」といふことになるから、ツイ酒を飲んでしまふ、自分の方にそれに引つかゝる素質がある所へ「どうだ」といつて頼められるから、「逆も堪らぬ」といふので遂に禁酒をして居つた者が又飲みだす、さういふ事は澤山あるのである。自分で警戒をして慎んで居るのを、どうしても慎むことの出来ないやうなことが起る。牡丹餅ならば牡丹餅は胃に害がある、自分は胃病だからといふので食はないで居る、所が餘所の家に行つたところが「丁度いまだ牡丹餅が出来たところだ、一つどうだ」といつて出されるものであるから、どうも食べないのも悪い、折角拵へて貰つた義理があるし、素ど〱甘い物は好きなのだからつい食べるといふやうな譯で、さういふ所から人間がひつかゝつて行く關係が人生は非常に多い。これは本人が悪いといふよりも社會の事情が悪いといふよりも、人間同士の生活の上にてはどうしても斯様な客塵煩惱に依つて迷はされるのが何處までも續いて行くのである。之れを全滅するところの政治もなければ、法律もなければ、社會組織もないものである。永久にその關係といふものは無くなることはないので、男女なら男女の關係といふものも、どこまで行つても男と女といふものはあるのであるから、餘り女が派手やかにはいかんとか、白粉をつけて居るからいかんといふけれども、白粉などをつけなくともそこに男女の愛慾といふものは起つて来る、アイヌ人や臺灣の生蠻の間にも戀愛といふものは成立つのである。世の中の風儀といふやうなことで、藝妓のやうな者が居るからいかぬ

といふけれども、藝妓を無くしたからと言つてもやはり男女の愛慾といふものは無くなりはない。又酒があるからいかんと言つて酒を無くしたからと言つても、他の食慾の上にて幾らでも人間といふものは醜い聞ひをするものである。唯だ形が變るだけのことで、人生といふものは六根六塵の關係に依つて、煩惱とそれを誘惑するところの刺撃に依つて、いろ〱とそこに悶を懷き罪を犯すといふ關係の極つて居るものである。それ故に社會の制度の如何に拘らず、文化の程度の如何に拘らず、各人がみな各々精神の修養を志して、さうして過失をとらんやうにして行くといふことが、何時の時代でも入用であらうと思ふ。

そこに一方に於ては佛性といふものがある。これは又表面は斯様に穢れて居つても、その本質に於ては決して失はないものであつて、表面は悪人のやうに見えても、又非常に煩悶をして泣き悲しんで居るやうな人でも、その泣き悲しむ心の底に佛性といふものは消えては居らない。非常に罪惡を犯しつゝあるそこに佛性は亡びては居ないのである、その奥にはその儘傷つかん所の立派な佛性といふものがある。その證據も幾らも證明することが出来る、非常な極惡罪の人間でも、例へば先年鈴辨殺しの山田憲とかいふ男があつた、ア、いふ風に自分が役人でありながら相場師みたやうな者を騙して、金を五萬圓借りて、それを返さずして濟まさうといふので〱鈴辨を殺して、さうして死體をトランクに詰めて信濃川に持つて行つて沈めて犯跡を暗まさうとした。さういふやうな悪人であつたけれども、彼が牢獄の中

で法華經を讀んでさうして悔悟した時には、彼自ら言ふて居る、「自分が若も死刑に處せられないで生命があつたならば、世の中に出て人々に人間の過ちを取らんやうに話をして見たいものだ」といふことを言つて死んだといふことが新聞にも出て居つた。さういふ大悪人でも一轉すれば佛性の光といふものは少しも無くなつて居ない。お釋迦様はその證據を澤山に擧げられて居る、提婆達多のやうな悪人でも一轉すればそこに佛性がある、阿闍世王のやうな悪人にも佛性がある、狂氣になつた女でもそれが正氣に復へれば佛性の光は失うて居ない。鬼子母神のやうに人の子を奪つて食ふ鬼婆でも、佛性は依然として有つて居るといふので、モウ殆ど廢れた人間のやうなものを、悉く佛性の啓發といふことをなさつたのである。人間に取つてこの位頼みになるものはない、一番有難いのは自分に顧みて佛性といふものが如何なる場合にも失はれて居ない、傷いて居ない、自分さへ覺醒たらそつくり無疵の結構な珠が自分に有るといふことは、これが人間として一番有難いことである。この佛性の珠は、生命から言へば始めも無く終りも無く常住の生命を有つて居つて、その生命の中にどういふ美しい働きでも出来る力を有つて居る、それが本當の自分である。悲しんだり怒つたり悶えたりするのは皮相である、それは一時の迷ひであつて、それが覺醒れば自分は本當の幸福なる生命を有つて居るのであるといふことの保證を明かにして貰はなければ、吾々の眞の眞の値打といふものは出て來ない。一時榮えたところが、一時學問をしたところが、ボンと頭を打つてそれ限り馬鹿になつてしまふやうでは何にもならない、非常な立派な人間になつ

ても死んでしまへばそれ限りといふことでは、まるで賽の河原みたやうなもので、積んだり崩したり、幾度繰返しても何にもならない。

所が非常な深い眞理の根柢からして、一切の者は不生不滅である、殊に人間の生命は不生不滅であるその生命の奥には佛性がちやんと存在して居るといふことをお釋迦様は縱横無盡に證據立て、下すつたその大慈大悲大智慧の御光のところに佛教の値打といふものはあるのである。この佛教を信すると言つたならば、自分に顧みて、如何に自分が表面積れて居つても、心の底には佛性の生命を失つて居ないといふことを堅く信じて、につこり笑ふことの出来るところに信仰といふものがあるのである。何か悲しいことがあつて、非常に泣いて居る時でも「ア、諸らんことを泣いて居つた、五十圓の墓口を落したといふので悲んで泣いて居つたけれども、併し五十圓は大金のやうだけれどもこの無限の佛性といふものを落したのではなかつたと考へれば、マア働かさへすれば又五十圓の金は出来る」といふ風にして、どういふ悲しい事でも佛性といふものに戻つた時に、その悲みといふものを打消す力がある。震災に遭つて家も焼けてしまつた、財産もすつかり焼けてしまつた、けれども自分の佛性には一點も疵が付いて居ないといふことを考へれば、又そこに慰めることが出来る。愈々死んで行く時でも、それ一つである、それが無かつたならばモウ死ぬといふことは實に辛いことになつて、何の頼りもなくなる、それこそ泣いても喚いても追ひつかない、噓りつきたいやうな心持になるのである。併しそれも體裁が悪いからと

思ふて、漸く苦しいのを堪へて居る譯であらうが、腹の中の心持といふものは實に掻きむしらるゝやうな譯である。それは宗教の信仰を持たない人の死の刹那といふものは實に可哀さうなものである、どんな大きな政治家でも實業家でも豪傑でも、宗教を信じない人の最期といふものは、みな胸を割んで悶へ苦んで死ぬのである。そこに幸に佛の教に依つて自分に佛性の具はつて居ることを信じ、さうしてその佛性に復りさへしたならば、さう一々外からいろ／＼なものを貫はなくても、自分自身に何よりも結構なものを具へて居る、智慧もあれば慈悲もあり、働きもあり、一切の幸福といふものがその中に具備へられて居るのである。

斯様に考へた時に、その佛性から現はれて來るものが人間の本性である、人間の本性は佛性を根本にしてそこから發動して居る所のもので、この中に親切もあれば、そこに恩義に感ずる精神もあり、いろ／＼人間の徳性といふものがこの佛性を基礎にして現はれて居るのである。人間の罪惡といふものは煩惱を基礎にして起つて居るものである、併しこれは珠について居るところの塵であり穢れである、本質は珠であつて、煩惱は珠にかゝつて居る塵である。そこで最初にこの煩惱客塵といふやうなこの「塵」といふ字を見つけた時には、非常に嫌やなものだと思ふたけれども、此處に來るといふとこの「塵」といふ字は少しも心配にならんことになる。「ア、これは塵であつたか、塵といふものは拂へば落るものである自分は珠であつた」といふことになるから、非常に嫌やであつたところの六塵の塵といふものは、考へ

て見れば恐るゝに足らん、吹けば飛んでしまふものである。自分は立派な佛性であるといふことになつて、始めて茲に安心立命の基礎といふものが立つのである。その佛性を知らずして唯だ安心して居るといふのは、狐に魅れて居るやうなものである。基督教に依つて「有難うございます」と言つて神様にお禮を言ふといつても、それは向ふは親切にして呉れるから有難い譯だけれども「それではお前は一體どうだ」と言はれて、「さて自分は……」と考へて見たらさつぱり譯がわからない、眞暗がりのやうなものである。さういふ宗教は採らないのである、佛教ではさういふ耶蘇教ぐらゐの教で信心をきめてはならないといふことを、お釋迦様は最初からお説きになつたのである。

いま日蓮聖人の仰せられる「自から横しまに降る雨はあらし」といふことは、法華經に基いて一切衆生みな佛性を有つて居るのであるから、それから現はれさへしたならば間違はないのであるけれども、世の中の六塵の穢れが風に依つて吹き捲るが故に、人間は間違つたことが起るのであるといふことを仰せられた。そこで深くこのことを自覺して、さういふ事柄に出遭ふ度に淨い心に復らうとして南無妙法蓮華經を唱へるのである、お題目を唱へることは、自からの人格を維持し、人格を完成して行く上に唱へるといふことが一番大事なことに考へて居らなければならぬ。それでも時には間違は起る、それは人間だから間違が少しも無いといふ譯には行かないけれども、過つては直ぐに悔ひ改め、又悔ひ改めして生活を續けて行くのである。一切間違のないやうにといふことは人間には出來ないけれども、悲んで

居つてもその悲みといふものは所謂哀んで傷れずで、そんなに悲んでも仕方がないといふので心が開けて行く。人を恨んで居つてもその恨みといふものが晴れて来る、苦しいことがあつてもその苦みが消えて行くといふ所に信仰生活の光はあるのである。それは一切さういふ恨みとか苦みとか悶えといふものを受けない人になれば實に結構だけれども、それは容易に得られない、併し一旦悲んだり悶えたりしても直ぐにそれが消える所の力を信仰に依つて得られるのである。(次續)

豫告

來る十六日第三日曜日は 恩師日生上人の御命日に相當仕候間、當日午後一時より本部に於て盂蘭盆會施餓鬼供養の爲め法要並に法話奉行候に付何卒御參詣相成度此段豫告仕候

昭和八年七月

財團 統 一 團

世法即佛法

財團法人統一團理事長 上 田 辰 卯

今晚は、幹事の方から『世法即佛法』といふ題で何か話すやうにといふ御交渉でありましたので、いろいろ考へたのでありますが、私は世法の方は、兎に角何年間か商賣をやつて來て居りますので、幾らかお話しも出來ますが、佛法の方は尚に暗いのであります。なまじひ此處でお説教じみたことをして、或は間違つた事でも申上げては却つて宜くないかと思ひます。随つて私の申上げる事が佛法に適つて居りますかどうか、能く御吟味の上に御取捨を願ひたいのであります。

先頃 私共の俱樂部で皆川司法次官にお出でを願つていろいろ珍しい話を伺ひましたが、その中で感じました事をチョット御紹介致さうと思ひます。

「一體日本中には四人が六萬人ぐらゐる當時居るさうであります。或は共產黨とかいふやうな大きな事件があつて、それが檢舉された場合には多少殖えますが、平常五萬乃至六萬の四人が居るさうであります。その中には無論男も居れば女も居る。老人も居れば青年も居る。又その犯罪の種類も、或は人を殺したのも居り、或は泥棒したのも居る。國事犯も居れば破廉恥罪も居る。種々雑多な者が居ります。随つて又

その犯罪の動機も、その犯罪の経過も、又犯罪後に於ける罪人の心理状態も殆んど千人が千人、萬人が萬人異つてゐるさうであります。然しそれ程違つた中にたゞ一ツ共通した點即ち何萬人の四人悉くが一人も間違ひなく持つてゐるものがあるさうであります。それは何かといふと自己保存の本能だ。自分だけ宜ければよい、自分の利益、自分の幸福、自分の安寧、自分の享樂といふものを追求して、それが爲に受ける隣人は勿論、親子、兄弟といふやうな、自分以外の者の迷惑は少しも顧みない。茲にモウ總ての犯罪者を通じて間違ひないところの心理状態がある。これは俗に言ふ自己保存の本能である。自分だけを活かして行かうといふ人間の性質であります。これが鋭く發達した者が犯罪者になるのであります。斯ういふお話でありました。

尙ほ附加へて言はれるには、これは決して人間ばかりではない。總てのものが、動物も植物も皆斯ういふ本能がある。能く海岸などで、大きな岩の上に立派な松が生えて居る。どうしてあゝいふ岩の上にあんな松の太木が生えるのだらうと思ふ事がありますが、それはやはりこの松が自分を活かさうとするところの努力で以て、見上げるやうな大きな岩石を打碎いて、さうして其處から自分の根を通して岩の下の地面へ根を張るのださうであります。私はそんなものを見た事がありませぬが、さういふ話であります。さうしてそれを見ても、如何に所謂心無き植物でさへも、自己を活かして行く爲には、恐しい大きな岩でも突破つて行くのを見れば、人間がその本能に支配されるといふことは、これ亦已むを得ない事であるやうにも思ふのであります。

併し人間は松ぢやないのでありますから、なにか松と異なつた人間の特性がなくてはならぬ。他の動物と異つた特性がなければならぬ。それはどうしても種族といふものを保存して行くところの本能である。自分を活かして行かうとすると同時に、自分の周囲の者も一緒に活かして行くといふところの本能である。この本能を鋭く四人に植ゑつけるのである。さうして自分だけ宜ければよいといふところの心を打破つて、自分の兄弟親子を始め、自分の隣りの人までも自分と同じやうに利して行かうといふ所の性質を植付けるのである。これが四人を取扱つたり、犯罪者を取調べたりする者の第一に頭に置かなければならない事である。斯ういふお話であつたのであります。

そこで色々譬へ話や何から考へて見ますと、やはり自分だけを活かして居るところの人間は、本當の幸福とか安寧とかいふものは得られないといふことは本當らしい。モウ五、六年前になりましたが、私が紐育の博物館に行きました時に、マンモスといふ象よりズツト大きい動物の骨が陳列してあるのを見ました。それは學者が何か掘つて居つた時一番最初にたつた一つのマンモスの脚の骨を見つけたのださうであります。そこでその骨をいろ／＼研究して、これは僅か山を歩いて居た動物に違ひない。或はこの動物はこれだけの太い脚に違ひない、この脚はこれだけの體を支へる爲の脚であつたに違ひない。これは斯ういふ肉食動物の脚に違ひないといふので、そのたつた一つの骨で以て全體の大きさを想像した—

「これはまあ餘計な話であります、さうして纏上げた一つの輪があるのであります、所がその後掘出されたマンモスの骨が、これが又能くも揃つて居たと思はれるほど立派に揃つて居りますが、實に恐しく大きな動物であります。

それを見ました時に、一體そんな大きな動物であるから、兎に角力もあればいろ／＼な點に於て他の動物より優れて居つた筈であるが、どうしてそれが減びてしまつたのだらうか。今はマンモスといふものは、白骨になつて居るのはありますけれども、世界中何處にも居りませぬ。西伯利邊へ行つてもさういふものは居ないでせう。亞非利加へ行つても居ないでせう。どうしてこの大きな動物が減んだらうといふことを聽いて見ました。所がそれにはいろ／＼の學説がある。弱肉強食、強いものが弱いものを食つて生きて行くといふ以上は、強いものが長く生きて居なければならぬ。それがどうして減びてしまつて、長く續いて生きて居ないのかといふと、これは幾多の學説、議論があるのだけれども、大體に於て彼があまりに體が大きかつた。マア大きな男は大飯を食ふといふやうなもので、大きな體をして居るものはどつさり食ふに違ひない。所がその時代にはマンモスが別に野菜を作つた譯ではない。肉食動物ならば、其處らにある草木を採り廻つて食つて歩いてに違ひない。肉食動物ならばあらゆるところに生きて居るものを食つて居たに違ひない。さうして自己の擴大を圖り、自己ばかり大きくする。詰り自己さへ生きて行けば宜いといふ。斯ういふ本能を兎に角發揮しようとしたが爲に、結局地上にある物を皆

食ひ盡してしまつてもまた自分の胃の腑を満たすに足らなくして、さうして到頭次第に絶滅して行つたのではなからうか。自分一人も食へないから恐らく自分の産んだ子供を丹精して育てる餘裕も無かつたらう。随つて子供も生れなかつたかも知れぬ、或は産んでも育てられなかつたかも知れぬ。自分があれほどの巨大な肉體を持つて居つて、尙ほ且つこの世の中の生存競争に落伍してしまつて種族が絶滅したのは、やはり自己保存の慾望に驅られて、その偉大なる體軀に委せて飽かず食物を漁つた爲ではなからうか。斯ういふ事を説明されたのを記憶して居ります。これもマア嘘か本當か知りませんが、さう出鱈目でもなからうと思ひます。さういふ事を考へて見ますとやはり自己だけが活きる。今の皆川次官のお話のやうに、自分だけが飽かず生きて行かうとするところの努力は、やがて自己を滅して行く結果になつてしまふといふことだけはどうも疑ひないやうに思はれるのであります。

さういふ話を土臺にして、これから申上げて見たいと思ふのであります、大體昔から人間社會の生活といふものは金が大變支配して居ります。最近に於ては殊に金がなければ總てが解決出来ない。金さへあれば馬鹿も柄口に見える。斯ういふやうな譯で、或は海の中に何十年も沈んで居つたやうな軍艦から金貨を引張り上げて金を産み出さうといふ、斯ういふやうな所謂黄金狂の時代になつたのであります、これは何も今始まつた事ではない。私も實は子供の時分から母親に植付けられた『お前金が無いのは首が無いのと同じだよ』と始終言はれたものであります。私は『どうも金と首とは少し違ひはしない

か、どうして金が無いのは首が無いのと同じなのだらうか」と小學校の頭でありますから不思議に考へた。「どうして、お母さん、金が無いのと首が無いのと同じですか」それはお前が大きくなればわかる。兎に角お前が商人になるならば、金が無い時には首が無いのだと思へ」と言はれたのであります。それで兎に角能くわからない儘にだん／＼大きくなつた。さうして商賈をボツ／＼始めて見ますと「成程金の無いのは首が無いと同じだナ」……私も最初洵に金が無くて不自由な思ひを致しました。私は今は煙草を廢めて居りますが、元好きでありました時に、敷島一本を三日に亘つて喫つたことも記憶して居ります。それで實際に商賈をやつて見ると、馬鹿々々しい男の言ふ事でも、金のある人間の言ふ事は御無理御尤もで通る。併し如何に頭が鋭くても、如何に惻口でも、借金取が來たり、高利貸に責められたりする者の言ふ事は眞理に聽えない。であるから頭腦が如何に鋭くても、金の無い人の言ふ事は三文の價値も無い。會社の重役であるとか、銀行の頭取の言ふ事はかなり、鈍重な事を言つて居つても、その言ふ事が如何にも尤もらしく聽えるのであります。これでは明かに金の無いのは頭腦の無いのと同じであります。頭腦の無いのは首の無いのと同じ譯であります。でありますから何事をするにも金が欲しい。それは人間は命が大事でありますから首が欲しい、がそれと同時に金が欲しい、金が無ければ首が繋げないといふことになるのであります。これは或は私が子供の時代に頑固な教育を受けたためかも知れません。がさういふ教育を受けなくても、社會生活をするにだん／＼さうなる。さうして今の人達が、金

と首とどつちか、マア首の次には金だと皆考へるやうになつて來たと思ふのであります。さうして日本と言はず、西洋と言はず恐らく地球上に在る人類といふものは、悉く金を集めるといふことに向つて狂奔しつゝあるのであると思ふのであります。

これは個人ばかりでなく、一つの會社でも、都市でも、國家でも、皆これと同じ事をやつて居ります。東京市は東京市でどうかして収入を多く上げたい。どうかして赤字を出さずに済ませたい。電車賃の値上でもして金を取りたい。市民は迷惑を被つても已むを得ないと言ふ。日本の國はどうかといふと、これもやはり如何にして金を日本の國內に保有しようかといふことに努力して居ります。歐洲大戦で世界中が戦つて居る間に、日本人は大分うまい事をして、借金がドツサリあつたのを皆返して、ザツト二十三、四億の金を日本が取つたでありませう。さうしてその取つた金をどうかして外國へ出すまい。これが金の輸出禁止といふ問題になつて現れた。大正六年から金の輸出を禁止して、取つた金は外へ出さない、握つた金は放さない。斯ういふ決心をして、日本は金の輸出を長い間禁止して居りました。詰り歐羅巴の國は勝手に戦争して金を使つて居る。けれども日本はその戦争の爲に金を儲けたのだから、この金は使ひたくない。斯う言つて握り締めたのであります。亞米利加も同様に四十億から五十億の金を握り締めた。さうして佛蘭西も、英吉利も、獨逸も、露西亞も、埃地利も皆金といふものは無くなしてしまつた。マア日本のやうな國は洵に幸で金をドツサリ儲けたといふので大層結構な筈であつたのであり

ますが、借てその結構なのがだん／＼やつて居る中に結構でなくなつて来た。何故結構でないかといふと、自分だけで金を持つて居つても、他の國に金が無いといふと、他の國では品物を買ふ力が無い。これは個人も國家も同じことであります。日本で生産した物を、英吉利でも、佛蘭西でも、露西亞でもどこでも買つて呉れないといふ場合に於ては、殊に日本のやうな生絲を外國に賣つてやつて居る所は大變です。亞米利加と日本で以て金を握り締めて居りますから他國に金がある譯がない。さうして見ると日本としては金は握つただけでも、品物が出ないといふことになる。向に困る。その中に、品物が出ないのはまだ宜いけれども、向ふには金が無いのだから品物が安い。そこで向ふの品物がドン／＼日本に入つて来る。日本は一生懸命になつて拵へても、向ふの、殊に獨逸品ナンといふものは安いからドン／＼入つて来る。それでどうも日本の工業が壓迫されて日本の産業が非常な苦境に陥る。詰り金を持つて居る爲に今度は二進も三進も行かなくなつて来たのであります。

そこで昭和四年でありましたか、濱口内閣が出来て、どうも金ばかり握り締めて居つてはいけません。金を出すべきものは出さうぢやないか、金を出すと物價が安くなる、さうすると日本の物價と諸外國の物價と平均が取れて来て、外國の品物があまり入つて来ないだらう。モット日本の物價が安くなれば日本の品物が外國に向つてドン／＼出るだらう。斯ういふ譯で金の解禁をして、持つて行くべき金は皆持つて行けといふ譯で金を出した所が、兎に角世界中は金が無くて非常に困つて居る、物價は向ふの方が

安いといふ譯で、一時國內だけで十三、四億もあつた金貨が見る／＼中に減つて来て、到頭一昨年の十二月には五億足らずにまで減つてしまつた。そこで、大養さんが代つて内閣を取つて再び金の輸出禁止といふことになつて今日まで来たのであります。

所で二十二、三億といふ金があつた時と現在の四億三千萬圓しかないといふ時と、どつちが良いだらうかといふことになる。日本としては金が無くなつた今日の方が宜いのであります。何故かといふと金が無くなると札を餘計出す。所が御承知の通り札には、十圓紙幣を見ると「此券引換に金貨拾圓相渡可申候」と書いてある。併しその札を日本銀行へ持つて行つても金貨と換へて呉れない、換へて呉れない譯は金貨は四億三千萬圓しかないのだから、十億圓から出て居る札を皆持つて來られた日には金貨はその半分にも足らない。斯ういふ譯で取換へて呉れない。換へて呉れないやうであると、札の價値が無いといふことになつて札の價値が下る、札の價値が下ると物の價値が上る、物の價値が上ると、それを製造して居る事業家或は商人といふものが浮んで来る。それで日本は金をドン／＼出してしまつたがそれが爲に井上準之助氏は殺されました。併し今になつて見ると、金を吐いて呉れて居たが爲に日本は助かつた、これが若し金を出さず持つて居つたら日本の物價はウンと高かつたでせう。高くなつて居ると、去年通りの世界的の物價大暴落といふものに遭つたならば日本はもつと／＼酷い目に遭つたかも知れぬが、幸に日本はそれまでに金を吐いて物價が安くなつて居つたものでありますから、外國の物價安

に對抗することが出来たのであります。斯ういふやうな状態でありまして、金々と言つて金を一生懸命に漁つた結果は、かなり拙い結果に陥つて居る。さうして一面金を吐いた後の日本を考へて見れば、かなり成功して居るのであります。

これは全く金が日本に無いからと言つて負け惜みでも何でもありません。その證據には金を持つて居つた爲に今日亞米利加に於ては日本より遙かに苦しい立場になつて來て居ります。亞米利加は御承知の通り世界の五割八分といふ金を持つて居ります。世界中の半分以上の金を亞米利加に於て持つて居る、皆金々と言つて金さへあれば宜いと言つて盛に金を集めたけれども、それではやはりいけない。これは日本が辿つたと同じ經路です。亞米利加は御承知の通り輸出國であります。品物を輸出して金を外國から取つてさうして亞米利加の國は潤はうて居つたのであります。前にお話した通りに世界中の半分以上の金を握り締めた。餘の半分の中の又その過半数を佛蘭西だけで握り締めてしまつた。さうして世界何十箇國とあるものが僅に二割そこ／＼の金を持つて居るに過ぎない。これでは如何に頑張つても亞米利加の品物を買ふ譯に行かない。随つて亞米利加は幾ら品物を安く拵へても賣れないといふことになつて來たのであります。

それとモウ一つは斯ういふ事が出來ました。それは亞米利加にある金といふものは流通しなくなつたのです。何故かと言ふと、亞米利加の國それ自身が既に金々と言ふのだから、個人がやはり金々と言つて、金に對する慾望が益々増して行くことは當然で、個人がやはり金を持つて離さない。それは亞米利加中に金はどつさりあるのだけれども、一人が假に一弗づゝ金を持つたとすれば一億弗といふものは無くなる、十弗づゝ持てば十億弗といふものが無くなつてしまふ。若し四十弗づゝ持つたならば、亞米利加中の金といふものはそつくり姿を消してしまふ譯であります。これは丁度東京市なら東京市の電車みたやうなものだと思ふ。假りに東京市には電車が二千臺あるとしませう。併し二千臺の電車があるといふだけでは駄目であります。車庫に入つて居るといふだけでは駄目であります。電車を始終運轉してこゝを始めて効力がある。一千臺の電車でも二回運轉すれば二千臺分になる。二千臺の電車を持つて居つても一回しか運轉しなければ、やはり輸送能力といふものは、二千臺分しかないののであります。假に五百臺でも四回運轉すれば宜い。やはり金もそれと同じであります。一圓紙幣でも十回運轉すれば十圓だけ百回運轉すれば百圓だけの効力があるのであります。亞米利加が世界中の金を大半自分だけで握つたが爲に他の國の購買力といふものは減退した。それと同時に又國民が金を死蔵するが爲に流通しない。斯ういふやうになつて、兩面で亞米利加は苦んで來たのであります。

さてこのお話しと先程前置にチヨット申上げた事とどういふ關係があるだらうかといふことになるのであります。日本には四人が六萬人からある。その六萬人の四人の共通の心理といふものは自分だけ良ければ宜いといふ、さうして隣りの人はどうでも宜い。斯ういふ事を考へた結果皆犯罪者となつた。

これでは世の中が壊れてしまふ。これは今の金さへあれば宜い、自分の國に金を集めさへすれば、他の國は金が無くなつてもかまはない、否、他の國は無くなつた方が宜いといふ心理状態と同一であります。茲に吾々の考へねばならぬところの一つの世の中の缺陷といふものがあるのではありますまいか。

私は商人でありまして、殊に製造工業といふ方面には、携らないどころの純然たる商人であります。隨て先程申しました通りに、金とか札とかの發行、流通、貯藏といふことに就ては常に研究を怠らぬやうにして居りますが結局人間の所有するところの金といふものは、最も有効な方面に使つて行くといふことで、初めて金の價値といふものも出て来れば、又金の安全性といふものも出て来るのだといふことを考へる者であります。くだらない事に使つたならそれは死蔵して居ると同じであります。併ながらこれに依つて隣りの人も活きられるだらう、これに依つて社會の人も幾らかでも救はれて行くだらうといふ事に自分の所有するところの物を使つて行くといふことが、全體の金を動かすところの基準でなければならぬ。さうして金が餘計世の中に動いたならば、金が餘計出来たと同じ状態になるのではなからうかと思ふ者であります。

話が又元に戻りますが、人間が自分自身の生命のみを安全にしようといふ時に自分の生命は脅かされて行く、人間の社會全體共に生きて行かうとする時に、初めて自分の生命も共に安全になるのだといふことは、先程申上げたのでありますが、これを種族保存の本能と言つて居ります。これは大變やかましい言葉であります、これを譬へて申しますと、これが一番發揮されたところの状態が親子の間の状態であると思ひます。母親が子供を可愛がる、父親が子供を愛する。これが全く種族保存の一番根本的のものだと思ふのであります。これもきいた話してあります、北海道で能く馬が熊に殺される。私はまだ熊と馬とが駆けつこした所を見たことはありませぬが、熊より馬の方が早いさうであります。馬は熊に追掛けられた所で駆けて逃げれば決して殺されるものでないさうであります。それが時々熊にやられるといふのは一體何時やられるかといふと、さまつてそれは馬が仔馬を伴れて居る時ださうであります。牝馬が仔馬に乳を飲まして居るやうな場合に熊が出て来る。その時仔馬を打ちやらかして逃せば自分はお助かるのでありますけれども、決して仔馬を打ちやらかして行かないさうであります。さうして仔馬を腹の下に抱へた儘熊に撲り殺されて死んで居る。而も多くは牝馬だけは撲り殺されて居るけれども、腹の下に抱へて居る仔馬は大抵生きて居るさうであります。さういふ話を聞いて見ると、洵に種族保存の爲に自分の生命を犠牲にする。自己保存の本能といふものを種族保存の本能の前に捧げることが大事であるかといふことがわかるのであります。雞でもさうださうであります、刀か何か持つて行つて雞の前に差出すと、直ぐ雞は逃げてしまひます。併し卵を抱いて居る雞だけは決して逃げない。さうして刀でも突き出せば嘴を開いて向つて来るさうであります。到頭最後に突き刺されて死ぬるまで動かないといふことであります、これも一つの種族保存の本能の現れであると思ひます。

又種族保存の本能の要求からでありませうけれども、親が子供を思ひ、子供が親を思ふといふことの間には餘程距りがあると思ひます。私も子供がありますから経験して居りますが、その間には格段な相違があるやうな気がします。同じだと言ひたいけれども、どうもさういふ嘘も吐けませぬ。私の子供は可愛がりますけれども、どうも親の方に對しては思ふといふことが足らぬやうであります。併ながらやはり世の中を善化して行くところのものは、種族保存といふ自己を犠牲にする親の愛情に如くものはないと信じます。

それに就て、儘か本多現下から伺つた事かと思ふので、皆様も或はお聴きになつたかも知れませんが、まつ子といふ婦人に就ての話であります。この婦人は古い言葉で言へば、女白浪でも言ふのでせう、泥棒で殺人までやつた非常な兇暴な婦人です。この婦人が犯罪を重ねて屢々監獄に入つたさうであります。幾度監獄へ入つても、出たかと思ふと又入つて来る。それで二十何回か監獄に入つた。或る時又捕へられて入獄したのでありますが、その監獄は、今は辭めて居られますが、有名な藤澤典獄の居られた監獄でありました。(今は刑務所長であります)その時に藤澤典獄がその婦人を見まして、この女は見ればやさしい綺麗な女であるのだけれども、どうして拗けた心が矯らないのだらうか。斯ういふので、愈々刑が満ちて出獄する時に、藤澤典獄がその婦人に「モウこれ切り悪い事をするのではないぞ、斯う言つた所で、お前はモウ二十何回と監獄へ入つた位だから、私の言ふ事もわかりはしないだらうけれども、たゞ一つ茲に記念品をやるから、これをお前は生涯肌身離さず持つて居なさい」と言つて五十錢銀貨にぶつ違ひに筋を附けて渡されたさうであります。「これをお前に一つ上げるから、この五十錢銀貨は決して他の事で使つてはいけません。この銀貨はお前がいつかお前の郷里へ歸つて祖先のお墓詣りをした時にその線香代に使へ、決して他の事に使つてはならぬぞ」と言つて藤澤典獄が五十錢銀貨に筋を附けて渡されたさうであります。所がその婦人は「なにをくだらない事を言つて居るか」と思つたが、併し折角呉れるといふのだから貰つて置けといふので、その五十錢銀貨を貰つて財布の中に入れて出獄した。さうして又善からぬ事をして居りましたけれども、運好く捕まりもしないで、郷里は儘か仙臺だつたと思ひますが、その方面へだん／＼と流れ／＼で行つたのであります。その間に、チョツト財布を出して買物に五十錢出さうとすると筋が附いて居るから受取る方でも嫌やがるだらうといふので、到頭何年かの間その言つたものだし、筋が附いて居るから受取る方でも嫌やがるだらうといふので、到頭何年かの間その言つたもの。するとどういふはすみでありますか、これもマア因縁とでも言ふのでありませう。その婦人が「自分の生れた所は此處だナ、あの典獄がお墓詣をする時にこの五十錢を使へと言つた、煩くて仕様がなから早く使つてしまひたい。それには丁度この際墓詣をして使つてやらう」といふ氣になりまして、そこで自分の家の祖先の墓のある寺へ参りまして、前の五十錢銀貨を出して、「どうぞお墓詣をさせ

て下さい」と言つた所が、豫て藤澤典獄からその寺の住職の方へ「若し五十錢銀貨にぶつ違ひに筋の附いたのを持つて行つた女があれば、それは囚人で、非常に性質の悪い女で悪い事ばかりして居る。これ迄説諭をしてもどうしても善くならぬ、それが若しあなたの寺へ行つたら、その女の伯母さんでも、伯父さんでも探して呼んで、さうしてその婦人の父親の愛情、母親の愛情といふものを墓の前で話して貰つてやつて呉れ」といふことを頼んであつたさうであります。そこへその婦人が五十錢銀貨を持つて来た。「これだな」といふので早速伯母さんと呼んだ。それからその婦人と伯母さんと一緒に家を出てしまつたのでありますが、その墓の前でその伯母さんが、「まづ子さん、お前さんは随分小さい頃に家を出てしまつたから知らないだらうけれども、お前のお母さんは随分お前さんの事を心配して居つたのだよ、お前さんは子供の時から大層綺麗だからといふので、お母さんは苦しい中からお前さんだけに絹物しか着せなかつた。さうして三味線の稽古だ、或は踊の稽古だと言つて、お母さんは随分苦しい中を丹精して育て上げて来た、所がそれが却つて仇になつて、お前さんは到頭遊藝に身を持崩してしまつて家を出てしまつた。お前さんは何も知らないだらうけれども、お母さんはお前さんが家を出た後といふものは、娘はどうして居るだらう、どうか無事で居て呉れるやうに、どうか悪い事をしないやうに、どうか悪い男に欺かれないやうにといふことを言つて、到頭お前さんの事を言ひ抜いて死んでしまつた。お前さん少しはお母さんの事を考へて御覽なさい」と言つて、いろ／＼母親の愛情を説いて聴かしたさうであります。

ます。所がさしも兇惡であつたその婦人もやはり母親の愛といふものには幾らか打たれたのでありませう。墓の前に跪いてしまつて、終ひには伯母さんが何と言つても掌を合せた儘顔も挙げ得なかつた。伯母さんもその儘にして置いた方が宜からうといふので、そのお寺を一廻りして来たけれども些つとも歸る模様もない、又三十分ばかり歩いて行つて見ると、まだ掌を合せた儘の姿である。一時間以上もさうして居つたといふ事でありませう。

さうしたモウ如何にしても感化することの出来なかつた残忍なる婦人の心にも、やはり母親の愛といふものが感ぜられましたものと見えて、今まで失はれて居つた佛性が目を覺して参りまして、その時に初めて婦人が過去にやつた事を懺悔して、實に斯程までの母親の恩を知らなかつたといふことは勿體ないことであつたと言つて一晩泣いたさうであります。さうしてその婦人が言ふには「必ずこの罪滅しは致します、伯母さん、どうか私の後の半生を見て居て下さい」と言つて、又何處か妻を隠してしまひました。するとその婦人は北海道へ渡つて、母親の無い子供とか、或は兩親を喪つた子、或は親から捨てられた子供等を集めて、なんでも本多狸下の話された時は五十人、六十人といふやうな多數の世話をやつて居つたやうであります。又それまでに丹精して育て上げた孤兒が何百人といふことである。さうして實の母親と少しも變らぬやうな態度を以て育てたといふことでもあります。

これはマア餘談のやうでありますが、さういふやうに、人間の本當の愛に満ちた心といふものが起る

と自己保存の本能といふものが征服されて参りまして、さうして他を活かすところの種族保存の本能が働いて來るのであります。或は聖人といひ、君子といふも結局さういふやうに自己を活かさうとする本能を犠牲にして、さうして他を活かさうとする本能を働かして行く者であると思ひます。先程申しますやうに、四人を感化するには、たゞ一つ自己保存の本能を種族保存の本能に置き變へるのだといふ皆川次官のお話は、洵に私共は能く合點が行つたのであります。

この考を以て今の社會の狀態を眺めて見ますと。商賣も悪い事ではなく、又製造工業も悪い事ではなく軍人も、學者も、百姓も皆鬼に角必要のあるものに相違ありません。併ながら總てこれ等の人が自己を活かさうとする本能を捨て、さうして他と一緒に生きて行かうといふ精神で進まなかつたならば、恐らくこの世の中といふものは幾何も出ずして破壊されてしまふのではあるまいか。丁度化馬が仔馬を蹴飛ばして自分だけ逃げ出せば、自分は安全であるかも知れぬが、仔馬は恐らく殺されてしまふだらう。もど〜仔馬があつてこそ、その仔馬が又仔馬を産み〜して、馬といふ種族が永遠にこの地球上に存在するのでありますけれども、牝馬が仔馬を蹴飛ばして自分だけが助かつたとしても、馬といふ種族は滅んでしまふといふことになりません。

私は最初にお断りした通り佛法の事は能く知らないのでありますが、佛法ではこれを布施といふ事を以てかなり能く説いて居るやうであります。吾々人間にはどうしても二つの本能がある。自分を活かして行かうといふのと、他と共に生きて行かうといふ本能であります。而して先程申す通り、金が無いのは首が無いのと同じである。さうするとその本能を全然滅却してしまふことは困難であります。又自己保存の本能があつてこそ、人間が活動して行くので、それがなかつたならば人間は忽ち衰滅してしまひますから、それも必要な一つの本能であるし、又同時に隣りの者、社會全體の者も共に生きて行かうといふ本能も缺くべからざる本能であつて、この二つの本能を能く調和して行く所に人間の眞の生活があるのではなからうか。私が商人だから勝手にさういふ所に我田引水の理窟を附けるのではありませぬが、人間の二つの本能の中から如何に害が有るからと言つて利慾の觀念をスツカリ除いてしまへば、人間の活動といふものは全然行はれなくなり、或は死滅に等しい状態になるのであります。さればと言つてそれをあまり活かし過ぎることは生命を滅す基であります。これは今の生物界のそれを考へて見ても想像が出来ることではなからうかと思ふのであります。

斯ういふ點を佛教は布施といふことで教へて居ます。尤もこれは在家の人に教へられた事で出家の方は別問題であります。在家に教へられたところのものは、正しいところの財を以て正しい道に正しく使へ、佛法には六度と言つて、人間の行はなければならぬところのいろ〜な點がありますが、在家に教へられるには、布施といふ行を一番最初に置いてあります。さうしてそれは何を意味するかといふと、自己保存の本能を活かして行く自己の利慾の觀念を活かして行くと同時に、他を活かして行く事に猛進し

ろ、斯ういふ教ではなからうかと存じます。さうして總ての人がこの二つの本能に完全に生きて来る時に、この世の中が始めて、先刻磯部さんのお話のやうに光ある明るい世の中になるのではなからうか。金が一萬圓なければ布施が出来ない、十萬圓なければ布施が出来ないといふものではないと思ひます。一圓の日給を取つて居る者でも十錢の布施が出来ないことはありませぬ。それは立派な布施であります。縦ひ千萬圓の布施をするに難も、惜しみ／＼するならば、それは完全な布施といふことは出来ませぬ。お互は清き布施をする時に於て、初めて自分の本能を正しく活かし、それが又自己を完全に保護する所以だといふことを考へて、分相應な努力と、分相應な布施をして共々に生きて行かうといふことを心掛ければならぬと思ふのであります。

まだいろ／＼申上げたい事がありますけれども、時間も経ちましたから、これで私のお話は終りと致します。(拍手)



花卉藝術と宗教

王山堂 松尾清明

華道と本多日生師の遺事と淺草統一閣前身
常林寺日寛上人のこと

○淺草(下谷)統一閣の前身常林寺住持日寛上人本松齋一得のことは、私が曾つて本誌上に於て述べました通り、一甫は世教に裨益を與へる心にて、齡六十歳の時より花技に遊びはじめ、百四歳の長壽を保つて遷化せられました。

○その花の姿は今日流行の自然挿しとは反對で、前後左右に充分に枝を伸し一見街氣に満ち満ちたものであります。

○これは何ういふものかといへば、一得が朝夕佛前に供華し花姿を制す上から供華として格構よきやうに心がけたる結果であります。故に一得の花は本尊様に供奉を第一の條件として正整したるものなれば

生花の「りつか」ともいふべきものにして、其の謹嚴さに於ては諸流の上に於て最も秀ぐれて居るかと思ひます。

○かういふやうなよき花型があるにも拘らず、私は一得の道を踏まなかつたのは別に(宗教的からいへば)統一的に顯本式に、而して又時代的に科學的に、華道を綜合してみたいからであります。

○私は明治四十年前後の事と思ひますが、華道の内容として六義一實なるものを唱へました。六義一實とは

- 一、理 論 (立義) 哲學上の價值
- 二、道 義 (世教) 教育上の價值
- 三、花 術 (技藝) 美術上の價值
- 四、風 流 (雅趣) 娛樂上の價值

- 五、出 性 (天真) 植物上の價值
- 六、養 生 (保養) 衛生上の價值

一、史事故實 (歴史因資)

右の通りでありますが、其の當時としては影響頗る大にして、智識階級連の共鳴を受け、嗜好順に向上して一般上流社會の流行、家庭藝術となりました。

○拙著『日本花史通略』第五期明治時代に「明治に入りて一時全く衰滅せしも廿年頃より少しく恢復し日清戦役後漸く盛んとなり、日露戦役後は更に復興し大に隆盛となる。明治四十年大阪報知新聞社は關西華道大會を催し各流の調和を計り、次で同年東京都新聞社は各流競技大會を催し大に各流の志氣を昂めたり、後四十二年は東京毎夕新聞社は大阪天王寺開園式に際して美術館に全國華道の大花會を催し大日本華道協會(前身)は之を機として大會を催し諸種の決議を爲せり、之より全國の華道會は全く大流行の潮勢を作り女子の如き殆んど學ばざるものなきに至る、僅かに二三年の事に斯の如き形勢を作るか我ながら其急速に驚き居れり」(明治四十四年十月記)

○其の頃の花會には皆私は關係して居り、華道界に

來ぬ」と答へたが、内心恥をいだいて、今度東京に來てからは花瓶には離れやうと思つた、であるから僕の瓶花は大方知らぬ人ばかりだと思ひます。爲に今回協會から有功盃を下さるに就ても、私の所在がわからず、やう／＼姪の渡邊婦美子をさがし出して同人が代理で拜受したやうな譯です。

○淺草區の山名日宗師が教會内に華道部を置きたいからといふて、僕は相談を受け、眞成流の芹田氏を世話し僕は補佐役として十數名養育しました。

○其後統一閣で補助教育として花卉藝術のことが話にのぼり、私が主任になつて教育することになりました。其時に本多上人は「第一番にわしが入門することにする」あの豪放な性質の上人が、道を愛する爲にはかゝる小技の弟子となることを苦となし給はず、予等をして大に感激なさしめられました。



は随分盡力したものです、さういふ譯で斯道先輩諸君より「華道の恩人」なりなどと云ひはやされて恐縮したことがあります。それかあらぬか今回、大日本華道協會々長より左の表彰状とともに美事なる銀盃一個を下されました。

表 彰 状
松尾 鼓 城 殿

君曾テ志ヲ立テ我華道ノ啓發ヲ策シ或ハ古籍ノ蒐集ニ或ハ新案ノ花型ニ其蹟頗ル見ルベキモアリキ今ヤ君其聲ヲ大ニセザルモ君ノ功没スベキニアラズ茲ニ銀盃一個ヲ贈呈シテ其勞ヲ表彰ス

昭和八年一月二十三日
大日本華道協會々長

正三位勳一等 長 岡 外 史

○是より先、友人山口菜花君來阪の節、「君は心が多くて困る、宗教や、書石や、茶花など多すぎる、之れを政治の一にして進んだなら、一層大をなすであらう」と苦言を受けた、「御忠告は恐れ入るが、僕の宗教は信仰、花書は趣味、これをどうすることも出

新 加 盟 者

- 山梨縣 鯉澤町一七二四 原 田 幸 八 殿
- 東京市 杉並區 成宗一丁目二八二 伊 勢 地 丸 子 殿

- (河合勝明氏御紹介)
- 福島市 陣場町一 三 澤 お き 殿
- 同 御山道上一三 夏 谷 泰 次 郎 殿
- 同 市外森合 水 上 ト イ 殿

- (福島總會御紹介)
- 東京市 日本橋區 大傳馬町一ノ一 野 間 平 次 郎 殿
- (磯部氏御紹介)
- 東京市 中野區 桃園町一四 雨 森 春 吉 殿
- 同 赤坂區 氷川町三 菅 沼 賢 治 郎 殿
- (家真金吾氏御紹介)

- 横濱市 保土谷區 峰岡町二七四一 平 岡 宗 次 郎 殿

(岩上浦三郎氏御紹介)



解放欄

京大の側面観

波 浪 生

京大問題が再燃したやうに見られる、そこには法學部が孤軍奮闘の變勇を餘儀なくせしめられてゐる恰好である。

京大では昭和三年の河上事件で經濟學部は自らの研究の自由を放棄してゐるではないかそれに法學部は今回瀧川事件で、大學に於ける研究の自由を死守すべく教授の總辭職か學生の總退學かを以て文部當局に抗爭してゐる、學者になれば捻ねられるものか、法學をやるには理窟をこれてみるものか或人は謂ふ。

昔から三つ児の魂百迄もといふが、京大法學部には傳統的の自由主義下社上の惡徳が脈々

として流れて居る、それが今度縁にふれて表現したまでの話である。

二

明治三十年、京大に對峙して西の都に産聲をあげた當初に於て、初代木下總長は快傑岡松博士を參謀として京大を凌駕すべき目標のもとに井上密、巖谷孫藏、千賀鶴太郎、高根義人、岡島錦治、仁井田益太郎、岡村司、新渡戸稻造、中島玉吉、神戶正雄、藤本勲三郎等々二十餘の新鋭猛者を集めた。何しろ胸中に無限の才氣あつても吐き場のない閑々たる逆境組の御連中は、得たり賢しきばかり體格たる謂氣が遙かに京洛の天地を覆ふに至つたのであつた。優さしい都の人は京大教授と豪酒は不離のものと思ひ、それに岡松博士の如き「酒の飲みぬ奴は大學教授たるの資格なし」と豪語した反響もあらう。彼等法科教授は例には侃々諤々の論議を周到綿密の論理を以て他科をリードし、日の將に浸せんとする頃には研究室から出て、車を連れ紅燈籠の巻へと駈込まれて行くのであつた。

三

吾て文部省から天降りに赴任した岡田總

れであつた。

五

現在の宮本法學部長は自由主義、自己主宰無神論者である、而して平等思想を懐いてゐる。この自己中心思想は遂に「國家も自分から出て来たものである」と公言するに到つたかゝる言論は我國に於ては許すべからざるものであるまいか、こんな思想の持主を最高學府の教授として居る間は、我國體を知り正義を主張する者が出れば當然問題を起さすには濟されまい、敢て識者の冷靜なる熟慮を望む。

かくて大事を成す

洗 心 庵 子

日蓮聖人の異體同心抄は、門下の集合によく引き出され高らかに唱へらるゝが、さて事實は門下一統はさて置き、同宗内ですら其の聖意を拘んでゐるであらうか、「道人尙法ヲ犯ス何テ以テカ俗人ヲ誨ヘン」と推古帝の御嘆息遊ばしたことが痛切に感ぜらるゝ時に於て

長が、授業參觀のつもりで岡村博士の教室に入るや、講義中の教授はハタと總長を認め付けて、「こゝは俗史の來る所に非らず」と大喝した事もあつた。又ある時教授連の懇親會の席上で藤本教授はツツ立って「總長！ あなたはこの席に何んで來たのですか、こゝにゐる我々を人間だと思つてゐるのですか、皆天狗です、天狗ぞろいの會です」と強次つて總長の出席を排斥したといふ話さへある。岡田總長が結局逃げ出した後へ理學博士齋地大龍氏が總長となり、氏が明治四十五年に福密顧問官となつたので、一時理學博士久原躬弦教授が總長を勤め、大正二年五月に東北帝大總長の澤村政太郎氏が京大總長に就任したのであつた。處が深く感ずる所あつて總長は理工文醫科に亘つて七人の教授を整理した、流石法科には手をつけなかつたが、京大でF自認の法科が何條之を監視すべき、仁保學長を中心にして「大學の自治制」を主張して立つた、「天降り總長が獨斷で教授の職を動かすやうでは、教授は安心して學問の自由研究をすることが出来ない、さういふことをするならば總辭職をするから」と連袂辭職

これは又明治維新時代に洵に愉快な情報がある。吾等の深く味ふべき寶訓と感ずる。

夫れはかの勤王熱に燃えさがる同志の武士が相集まつて意見を闘はしてゐた頃の話である。一夜肥滿の體軀を乗り出した西郷吉之助が、「お互に國家に捧げた身心ぢや、私憤は捨てやうぢやこわさんか」

ともすれば私情私憤にも傾き易い激論や感情を、彼はこの一言にたしなめたのである。

亢奮した一座の面々も、この凜とした一言に成る程と氣づき、皆が皆彼の所説を守ること誓約した。と、その時、サツト氣色ばんだ顔をして座を起つた者がある。同志中の硬骨漢で智謀縱横の眞本和泉だ、彼はツ、と西郷の前へ進むと見るまに、イキナリその大頭をゴカリツと振りつけた。

「何をやる。」

不意打ちを喰つた西郷はカツとなつて睨みつけた。だが相手は平氣なもの、

「痛かつたか」

「痛かつたかとは何ぢや、人のドタマをドナシつけて、おはん何する」

太腹腹の西郷も、この時は餘程癪にさはつた

を以て當局と抗爭したのである。遂に奥田文部大臣は大正三年一月廿四日、大臣官邸に於て京師帝大教授諸氏に對し「教授ノ任免ニ就テハ總長ガ職權ノ運用上教授會ト協定スルハ差支ヘナク且ツ妥當ナリ」との意志を表明した。それ以來京大に於ては教授の進退に就ては教授會の同意を得ることを要するといふことが、その確立せる法制運用上の規律となつてゐる。これこそ京大法科の華やかなりし時代の記念塔であり、京大に於ける學問研究の自由につき、凱歌と共に獲得した歴史的現象である、學問研究自由主義は爾來傳統的な精神として一種の氣骨が漲つて來たのであつた

四

聽る者は久しからずである、大正八年に法科は經濟學部を分離獨立せしめて、自ら法學部となつたが、經濟、社會諸問題への緊切な興味とマルクス主義の魅力は、京大即經濟學部、京大即河上といふ印象を興へ、從來の誇りであつた法學部の勢力は漸く其陰の薄れ行く次第であつた。嗟、盛者必滅の理りか……面かも急激に據頭せるものは又急激にへこむ運命に遭遇するものか、河上事件がそ

らしく、大刀に手をかけ今にも斬り捨てんぞ身構へた。この態を見た和泉は却て笑ひ出した。

「何が可笑しい」

「可笑しうなうてどうする、あんな今何といふた、お互に私憤を捨てやうと云ひ出して、一同に誓はせた張本人ぢやござんか、それにこんな事をムキになつて憤るやうぢや、あんなの器も小さいナ、さうでござんそハ、」

何の事はない、和泉は彼を撲りつけて其の心中を試したのだ。

「ウーム……申譯ござん」

西郷は呻りながら詭言をいふた。何んぞ偉大！ 又和泉のこの果敢の教訓こそ、其後の大西郷ならしむるに預つて大に力ありしは以て知るべきである。

齋祖、血脈抄に云く、「總じて日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して異體同心にして南無妙法蓮華經と唱奉る處を生死一大事の血脈と云ふ也。然も今、日蓮が弘通する處の所詮是也」等南無妙法蓮華經

記事

本部 團報

本曜日晚 小林一郎先生の法華經講座は六月中旬から、迷門の中心である方便品の開講となり、一百の來聴は熱心にノートしつゝ時の過ぐるを惜みて、求道の眞摯なる意に貴い場面を現出し、そこに澄潤たる活調に合掌する畢竟千言萬語も、一つの實行に資せんが爲めであつて、永年有難い法門を聴聞しつゝ、又説きつゝ、イザとなつて我に執はれ、我所に迷ふは淺ましい。吾等はよい教は必ず之を實行すべきやう力めたい。

日曜日法要と講演 「信ありて解なければ無明を増長し、解ありて信なければ邪見を増長す信と解と眞通して方に行的本と爲る」とは涅槃經の有名な金文である。吾等は法を聴くこと俱に又御寶前に合掌至心禮拜を行ふことが最も大切である。忙しい世の中に一周二回の集りは忙しいといへば忙しい、寸暇もないのが普通であるれば共「各思ひ切り給へ」で、

今死に直面して居るナと感ずる刹那、忙しいからでもない、未だ若いからと油断も出来なない、「最後臨終」の用意こそ要中の要であらう五月第四の日曜より六月第三日曜迄の四回に亘つて敬虔なる法要を、左の通り開講された

- 一、開目抄續講 河合妙明氏
- 一、我等の國家意識に就て 榎本顯正師
- 一、京大事件に對する根本策 磯部滿事氏
- 一、日蓮主義とは何か 中村清一氏
- 一、唯有一乘法 小西日喜師
- 一、伊豆法難の靈跡を拜して 山口智光師

横濱 教誌

五月三日 夜、中區壽町の長久保氏方にて集會。
同 九日 夜、磯子の高橋氏方にて集會。
同十二日 夜、神奈川鶴屋町の京田氏方にて集會。此日は丁度伊東御法難の日に當るので、それに関する御法話を磯部先生から聞いた。
同十三日 小西日喜師東京より御來講。午

後三時生麥の具探氏方、午後七時神奈川三ツ澤の岩上氏方にて。

同十四日 夜、中區白妙町の長谷川氏方にて集會。

同十五日 東京より和賀義見師御來講の豫定であつたが、御急病のため御來講なく物淋しかつた。でも、信者は當の如く寄り集ふて午後は神奈川の石毛氏方で、夜は二本榎の金子氏方で、それからお勤めだけした。

同二十四日 夜、磯子の大内氏方にて集會
同二十七日 夜、神奈川三ツ澤の齋藤氏方にて小西日喜師の御法話。

此月、磯部先生、十五日の外は毎回東京より御來演あり、数夜に亘つて「善無長三藏抄」の講義を下された。ありがたいことである。三軌弘經の白衣の法師を、求めざるに得た身の冥加を喜ぶばかりである。

京都 鴨東 教報

◇川東本正寺に於ては四月八日夜七時より釋尊降誕記念公開講演會を開催した。各講師の熱辯は聽衆に多大の感動を興へて十時半散會

した。講師諸題は次の如し。

- 一、釋尊の大意 山主 大川孝準師
- 一、法華經の佛陀觀 寂光寺貫首 金光日心師

◇仁王門本山寂光寺に於いては同月二十日午後二時より婦人會例會を開催した。法要後貫主金光日心師「非常時に於ける婦人の覺悟」と題して明晰にして懇切なる講話があつた。當婦人會は月を重ねるに隨つて參詣者が増加するこゝが目立つ。

◇新町頭日蓮宗本山妙覺寺に於いて四月二十八日午後一時より京都十六本山主權の許に開宗記念大講演會が開催された。一時より音楽法要がありそれより講演會に移つた。前講は日蓮宗布教師木下一英師(妙覺寺貫首藤田文哲師高講の豫定であつたが俄かの支障で木下師代講す)で次に本山寂光寺貫首金光日心師の「聖祖に何にか學ばん」と云ふ演題で纔々一時間三十分に亘る講話があつた。情の人日蓮聖人を幾多の實例を擧げて熱涙と共に語られしこゝで聽衆に多大の感動を興へ嘖泣の聲隨所に聞えた。講演後は清興に移り「日朗坂」を筑前琵琶竹内旭鈴嬢が演奏した

◇本正寺では五月八日午後七時より二樂會春季總會を開いた。
一、宗教規範と日蓮主義會長 大川孝準師
一、精神生活の基調 本山部長 川崎英照古下
多數參會して實に盛大であつた。
◇十日には本正婦人會を開いた。二時より修法、後説教に移る。

一、信仰感話 椿 常純師
一、余の二大信念 山主 大川孝準師
會程に夕刻散會す
◇算砂で名高い洛東本山寂光寺では五月二十一日に本因坊日海上人(本因坊の鼻祖にして當山の第二祖)の祥當會法要並に圓壽大會が催された。當日は相惜の雨天であつたが基客は陸續と參集した。九時から京都全僧員出席金光貫首の大導師の許に嚴かに法要が誓まれた。法要後は直ちに基會に移つた。二百名の來會者にして、さしもの大本堂もいと狭しと感じた。當日全勝者三勝者には本因坊先生を始め諸名士揮毫の書畫を贈與した。こゝに特筆すべきは本因坊秀哉先生が東京より本會のためにわざわざ入洛臨場されたことである。

尙感謝すべきことは本會のために四段吉田操子先生が連日飲食を忘れて盡力せられたことである。因みに當山では本日の催しを年中行事の一つとして向後毎年盛大に營む由。
 ◇同月二十五日には本山妙泉寺の開山會に併せて寂光妙泉婦人會が催された。二時より京都僧員出陣金光貫首大導師の許に嚴かに法要が營まれ、法要後貫首の説教あり、後餘興に移つた。津田秀月氏の演曲、會員の舞等である。餘興後は晩餐會に移つた。歡聲笑聲起り實に賑かであつた。

福島教信

六月十日 午後一時半より福島高商校日蓮主義講演會に於ては和賀、河合の二先生を御遊へし例會を開く。一同動行を修行し終つて河合先生の無量義經の御講義あり、次に和賀先生の日蓮主義より見たる社會の諸問題につきての御講話あり、御多忙の伊藤校長先生を初め、學生諸君、福島支部の同志等多數參會して感激の裡に四時半散會す。

二本松教報

同日 午後七時より福ビル三階廣間にて思想對策日蓮主義講演會開會福島高商生皆井君開會の辭を述べ、河合先生は「日本の統一と日蓮主義」と題されて熱辯を振られた。次に和賀先生は「建設の力としての日蓮主義」の講題の下に洋々として説かれ非常時にある我々民衆に強い一層感激を興へられた。わけて

五月六日 於蓮華寺題目講修行。
 同十五日 社會事業二本松佛教不乘會托鉢修行。
 同十九日 札幌市顯本寺通夜説教修行。

◇六月四日午前十時には同山歴代故上田上人の三回忌、故秋原上人の七回忌、故野口上人の三回忌、其外田上人の廿三回忌、當日靜上人の卅三回忌、本多上人の三回忌の法要が盛大に營まれた。遺弟、遺族、信徒、多數參詣し、參詣者中には大本山本國寺信徒總代天野治右衛門氏、前市會副議長石田吉氏等の顔が見えた。一般に供養を出した。
 ◇同月十日日本正寺では本正婦人會例會を開いた二時より法要後説教に移る。

一、五常道徳と信仰 椿 常純師
 一、婦人と信仰 山主 大川孝準師

寄附維持金圖費誌料領收

自五月二十一日至六月二十日

一 金六	圓也	朝鮮	川上	謙二殿	一 金五	拾	錢也	同	野間平次郎殿
一 金貳圓貳拾錢也		愛知縣	山本	金大殿	一 金貳圓貳拾錢也		同	家喜 金吾殿	
一 金壹圓貳拾錢也		神戶	延廣	純靜殿	一 金貳	圓也	同	長谷川義一殿	
一 金貳圓貳拾錢也		山梨縣	原田	幸八殿	一 金壹圓	圓也	同	中山和四郎殿	
一 金貳	圓也	東京	齋藤	リイ殿	一 金壹圓	圓也	同	小澤 元重殿	
一 金貳	圓也	同	遠山	いよ殿	一 金貳圓貳拾錢也		同	西村 正殿	
一 金拾	圓也	横濱	中村清兵衛殿		一 金貳圓貳拾錢也		同	濱中治三郎殿	
一 金貳圓貳拾錢也		東京	伊勢地九子殿		一 金貳圓貳拾錢也		同	宇野 博順殿	
一 金拾	圓也	同	井上道太郎殿		一 金四圓四拾錢也		同	有田 安道殿	
一 金貳圓貳拾錢也		福島	三澤おきみ殿		一 金拾	圓也	同	澤田萬壽種殿	
一 金貳圓貳拾錢也		同	夏谷泰次郎殿		一 金拾	圓也	同	田村幸次郎殿	
一 金貳圓貳拾錢也		同	水上 トイ殿		一 金貳圓貳拾錢也		同	木村 祥殿	
一 金貳	圓也	東京	沼部彌太郎殿		一 金拾	圓也	同	横山 正三殿	
一 金五	拾	同	日下部二葉殿		一 金貳圓貳拾錢也		同	平岡宗次郎殿	
一 金拾	圓也	同	一本木悦太郎殿		一 金壹圓貳拾錢也		同	横山 正三殿	
一 金貳圓貳拾錢也		同	竹内 文治殿		一 金壹圓貳拾錢也		同	安江 清海殿	
一 金貳圓貳拾錢也		同	西田 力殿		一 金壹圓貳拾錢也		同	中村清兵衛殿	
一 金拾	圓也	横濱	吉田三郎兵衛殿		一 金五	圓也	同	紀伊 乾 淳甫殿	
一 金參	圓也	東京	伊藤 ナヲ殿		一 金五	圓也	同	川越 原 次郎殿	
					一 金五	圓也	同	朝鮮 御厨 正幸殿	
					一 金五	圓也	同	東京 大塚 誠殿	
					一 金五	圓也	同	山田 英二殿	
					一 金五	圓也	同	秋澤 吉藏殿	

一 金壹圓貳拾錢也	同	櫻井惣右衛門殿
一 金貳圓貳拾錢也	同	富山 岡 爲太郎殿
一 金貳圓貳拾錢也	同	東京 島本 あさ殿
一 金貳圓貳拾錢也	同	千葉縣 山田甚之丞殿
一 金貳圓四拾錢也	同	東京 土屋 喜久殿
一 金壹圓貳拾錢也	同	大阪 東 峰太郎殿
一 金壹圓五拾錢也	同	東京 菊地 雄三殿
一 金拾	圓也	同 井上道太郎殿

財團法人統一團會計

感謝

文學博士姉崎正治先生より本部へ名著「法華經行者日蓮」改訂新版特製をば御寄贈相成難有以紙上厚く御禮申述候

財團 統一團圖書部
 法人

謹告

各位の待望されて居りました故本多日生上人御撰述に係る本經祖書要文全部が掲載された勤行方軌としての法華經要品が今回百日振りで清朝新活字を用ひて見事に出来致しました。又日生上人が先年入念に弘通用として謹書し置かれし大曼荼羅御本尊は授與願出の方に感得者心得を相添へ、前記要品と俱に七月八日御本尊始顯會聖日からお願ち致すやう相成りました。

因に諸製部数が限られし爲め比較的高價となりましたが、此御本尊と要品があれば子々孫々迄も信行上には百パーセント疑ありません。且つ要品には本經祖書要文全部ありますから自家用には勿論布教用にも施本用にも洵に適當と存じます。

故本多大僧正撰

法華經要品

並本經祖書 壹部
要文集 金四拾五錢

御本尊

大特別用
中普通小型佛壇用
小懷中用

授與御希望の方は願書提出の事書式用紙は御報次第差上ります。

一册 金貳拾錢 送料五厘
半ケ年 金壹圓貳拾錢(送料共)
一ケ年 金貳圓貳拾錢(前金之事)

▲御込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和八年六月廿四日印刷納本
昭和八年七月一日發行

(第四百六十號)

不許複製

編輯兼 磯部 滿事
印刷人 鈴木 日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團

東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三三六番
總替東京九四二〇番

目次

聖訓摘要	日
日什正師諷誦章講話	生
解放欄	顯
京大問題と共產黨首領轉向に就て	正
價值・存在及淨土	人
杉森氏の倫理學を讀む	
内船から重須へ	
記事	
	和
	村
	武
	敏
	賀
	田
	田
	三
	郎
	見

○本團報並に各地教信

○寄附團費誌料領收

第三十八年八月號

統

一

財團法人統一團發行